

“Ports of the World 1972 Twenty-fifth Edition”

Published by Benn Brothers Limited, London England

松木俊武
(日本サイロ)

「Ports of the World」1972年版はロンドンの Benn Brothers 社の刊行により版を重ねて今号で第25版となった。大型の A-4、頁数にして867頁、海運・海事・港湾関係の会社の広告をのせた部分を除けば中味はすべて文字通り世界の港に関する各種情報の集積である。一体この地球上に外航船のための港というものがいくつ位あるものだろうか。私は港に関係のある仕事に従事して足掛10年になるが、実は漠然と7～800、ひょっとして1,000もあるだろうかと考えていた。本書の巻頭に Index to Ports という頁がある。そこでこの本において取扱っている港を一つ一つ拾って見た。何んと2470に達したのである。一港にして二通りの呼称を有するものもすべて網羅しているので、実際には約2,350位になるであろう。本書は100余国に点在するこれらの港という港をすべて克明に記載している。

全編は「United Kingdom」「Europe」「Africa」「The Americas」「Asia」「Australia」の6章に分かれている。第1章の「United Kingdom」以外はその地域の国がアルファベット順に並び、その国の主たる港が同じくABC順にリストアップされている。そして国別に使用されている通貨の名称、その国特有の祝祭日、土曜日の扱い方、各種港湾基本料率等の記載があり、それぞれの港に移る。一つの港については大むね、経度・緯度を記し港湾局又は管理者の住所・電話番号があり、その港の特長・水路の状況・泊地の広さ、バース・ブイの種類・規模、荷役機械とその能力・保管設備等が書かれており、更に Bunkerチャージ・船舶修繕設備・曳船パイロット関係、連絡交通機関ならびに当該港湾に関係のある開発計画などの記載がある。国により、港によってその内容に精粗の差はあるにせよ、要するに上記した内容のみが次から次へと並んでいるのである。

人によっては何んだそれだけのことかと思うかも知れない。事実私もこの本についての文献紹介の依頼を受け、最初は一体これが港湾経済学会の年報にのせる価値を有するだろうかと思ったりした。しかしながら手に取って通覧して行くうちにこの本の

持つ尋常でない迫りに打たれ、ある種の感慨を抱くに至った。この感慨を正確に言い表わすことはむずかしいが、その情念を構成しているいくつかの要素を列記して見ると次のようになる。

第一にこの本の有する優れた実用性である。副題をつければ世界港湾辞典と称する資格がある。各頁に並んでいる事項は、卒然としてこれを眺めれば何んの変哲もない1個の数字、1つの名称に過ぎないかも知れない。しかしその一つ一つをUp to dateに正確に知り記載するというにどれ程多くの努力と労力が費やされているかを思うと深い感銘を覚える。古風な表現かも知れぬが、かつて七つの海に雄飛した大英帝国の意地と面目の片鱗をそこに見るであろう。

第二にこれは当然のことであるが、この1,000頁近い大部の本には主義・主張のかけらもない。しかしこの本を第1巻から今号の第25巻迄を並べて見たとすればそれはおそらく存在そのものが何かを語るかの如くである。19世紀から今世紀にかけて自然科学および科学技術は実験と観察を武器として飛躍的な発展を遂げたが、社会科学においてそれに対応するだけの発展が成されていないというのが今日通説となっている。たしかに社会科学には実験による理論の証明という有力な手段を欠いている。しかしながらそれだけではない社会科学の研究にたずさわる人々の側にも一端の責任がある。何故かならば何れの分野にせよ、総じて息の長い、地道な統計・資料の整備が行なわれておらず、よしんば統計や資料はあってもその活用においてとかく主義・主張に急なあまり、ややもすれば恣意的もしくは撰取的に流れ勝ちであり、更にはまた具体的な事実の裏付けを欠いた議論が行なわれることが多かった。横道にそれだが、「Ports of the World」はかかる風潮とはまったく無縁であり、ただひたすら地味と正確に徹して25版を算するに至った。本書はこの点から見ても港湾に関する貴重な基礎資料の一つとして今後その価値を示すことにならう。

第三番目に感じたことは本書に記載されている港を一つ一つ眺めて行くうちに文字通り世界が一つに成りつつあるという実感が湧いて来たということである。これだけの港に毎日何千、何万という船が、ありとあらゆる商品を積んで行き来している。そしてそれは日々に盛んになって行く。人類の歴史において今日程港湾が重要な役割を果たしたことは無いであろう。私は図らずも中世から近世に移行せんとする折にある経済学家が指摘したところの「都市の空気は人々を自由にする」の一言を想起した。港湾を単に船の行きかう所、物資が出入するところとだけ考えてはなるまい。経

済史家の顰にならえば「港の空気（情報）は人々を平和にする」と言えないこともない。港湾というハードウェアをよりよく活用するための各種機関，機構の整備とならんで本書の如き基礎的な資料が今後続々と出現することを願って紹介の一文を終えた。